

論文審査の結果の要旨

氏名：加藤友衣

博士の専攻分野の名称：博士（心理学）

論文題名：パブリックアートが景観評価に与える影響に関する環境心理学的研究

審査委員：（主査） 教授 羽生和紀

（副査） 教授 岡 隆 教授 内藤佳津雄

本論文は、パブリックアートの存在が、それが置かれた場所全体の景観に与える影響について環境心理学の観点から検討したものである。ここでのパブリックアートとは公共空間に設置される芸術作品を指しているが、公共空間においてはすべての利用者が当事者になるために、公共空間に関する意識に関して研究を行う意義は大きい。しかし、パブリックアートの持つ効果に関しての実証的研究はこれまでほとんど行われていない。本論文では、環境心理学の中で行われてきた景観評価研究の理論と研究法を援用し、特に都市の公共空間の景観評価に対するパブリックアートの持つ情動的な影響に関して、実証的に検討している。環境心理学における景観評価の研究においては、Russellの二次元モデル理論とBerlyneが提唱する、対比の特性と覚醒モデルが代表的理論といえる。Russellの二次元モデル理論とは、人による環境評価が「快-不快」と「覚醒-非覚醒」という2つの基準で説明可能であるというものである。この2つの基準、あるいは次元は独立とみなされるために、直交させた場合に生じる4象限には、それぞれエキサイティング、ストレス、退屈、リラックスという代表的な景観の類型が対応することになる。Berlyneの対比の特性と覚醒モデルとは、視覚刺激間の不調和のような、お互いに対比されることで生み出される視覚のもつ特性が、覚醒の度合いに影響を与え、そして喚起された覚醒の程度が中程度のときに、それ生み出した視覚的な刺激は、もっとも美的質が高いと評価されるという理論である。本論文においては、Russellの快とBerlyneの美的質をほぼ共通する構成概念として扱い、2つの理論それぞれの示す仮説の検討を丁寧に積み重ねている。

本論文の第I部、序論では、環境評価に関する研究、特に上述したRussellとBerlyneの研究および、彼らの研究の流れをくむ研究について概観し、景観評価の実証的研究における彼らの理論の妥当性と有効性を確認している。次いで、環境評価に影響を与える要素として本研究で注目したパブリックアートについての説明を行っている。

第II部の実験的検討では、背景となる景観に異なる特性を持つパブリックアートを組み合わせた画像刺激を用いた5つの実験的研究（研究1から5）を報告している。研究1では、予備的検討として、自然景観と都市景観の評価にパブリックアートが与える影響を検討している。結果は、先行研究で示されてきた、評価における自然景観の都市景観に対する優越性を支持したが、都市景観にパブリックアートがあった場合に、快および覚醒の評価が高まる可能性が示唆された。つまり、自然景観よりも評価が低い都市景観においては、パブリックアートにより景観が改善される可能性が示され、そこで以降の研究では、対象として都市景観のみを取り上げ、パブリックアートの効果を検討している。研究2では、研究1で示された都市景観に対するパブリックアートの肯定的効果の妥当性を確認するために、パブリックアートが設置されている複数の都市景観を刺激として実験を行っている。そして、それぞれの刺激について、パブリックアートの存在するオリジナルの景観と画像処理によりパブリックアートを削除した景観を対にして、評価を行わせている。結果として、パブリックアートの存在は景観に対する覚醒の評価を常に上昇させるが、快評価においては、パブリックアートの性質が効果の正負の方向性を決めることが示された。しかし、研究2では、景観とパブリックアートの組み合わせが固定されていたために、適合のような組み合わせにより生じるであろう文脈効果に関しての検討ができない。そうした文脈の効果についても検討するために、複数の背景と複数のパブリックアートの全組み合わせを刺激とする実験として研究3が行われている。研究3では、刺激に対する快と覚醒の評価を従属変数とし、それぞれの背景とパブリックアートを独立変数の要因とした分散分析を行っている。その際、各背景と各パブリックアートが、それぞれの要因の水準になっ

ている。結果として、効果量の解釈から、景観とパブリックアートの交互作用よりも、パブリックアートそのものの主効果が、都市景観全体の評価に与える影響として大きいことが明らかにされた。つまり、評価の高いパブリックアートは、文脈の影響を超えて、景観評価を高める傾向があることが示された。

研究 2 と研究 3 で刺激として用いられた都市景観は、首都圏の商業利用の先端的な再開発地域で、既に覚醒の程度が高めであり、改善の余地が小さいと考えられた。そこで、研究 4 では覚醒があまり高くないありふれた都市景観を対象として、景観とパブリックアートの組み合わせによる評価を検討している。そうしたありふれた都市景観に、快が高いまたは快が低いパブリックアートを組み合わせさせた結果は、快の高低にかかわらず、パブリックアートの存在は覚醒評価を高め、また快の高いパブリックアートは、景観全体の快評価を高めることを示した。しかし、快の低いパブリックアートは景観全体の快評価を下げた。つまり、覚醒が低めで、やや退屈なありふれた都市景観に関しては、快評価の高いパブリックアート設置の有効性が高いことが示された。

研究 3 および研究 4 の結果は、パブリックアートのそのものの主効果が、背景となる都市景観とパブリックアートの文脈効果である交互作用よりも相対的に大きいことを示している。他方で、背景の都市景観とパブリックアートの間の適合を直接測定した場合には、この適合と快の間はかなり強い正の相関関係が示されていた。そこで、研究 5 ではこの 2 つの結果を統合的に解釈するために、研究 3 で得られたデータの再分析を行っている。その結果、快評価が非常に低いパブリックアートがあるために、パブリックアートの主効果の効果量が相対的に大きくなっているが、個々の組み合わせ内においても、適合度と快評価にはある程度の正の相関関係があることが示された。

第 III 部の応用的検討では、現実場面への適用を視野に入れた 2 つの研究（研究 6 と 7）が報告されている。研究 6 では、実験参加者に、もっとも適合が高い組み合わせと適合が低い組み合わせとなる、パブリックアートと背景となる都市景観の組み合わせ 2 つを選ばせている。結果として、不適合が覚醒を促し、景観全体の評価に影響を与えることが再確認された。また、実験参加者から聞いた組み合わせを選択した理由に関する質的分析もこの解釈を支持していた。これら結果は、文脈の重要性を示していると考えられる。研究 7 では、パブリックアートが既に設置されている大学キャンパスを対象として、パブリックアートの環境評価に与える影響を検討している。結果は、その存在がよく知られている場合に、快と覚醒の程度が高いパブリックアートが、キャンパスに対する評価を改善していることを示した。

第 IV 部、結論では研究 1 から研究 7 までの結果をまとめ、研究の意義を示し、最後に総括的な考察を行っている。

本論文における研究成果をまとめると、1) パブリックアートの存在は都市景観の覚醒の程度を高め、また快評価の高いパブリックアートは、都市景観の快評価を高める。しかし、快評価の低いパブリックアートは都市景観の評価を下げる、2) このパブリックアートの都市景観への影響は、特に、覚醒の程度が低い、ありきたりな都市景観において顕著である、3) 都市景観の快評価を高めるためには、快評価の高いパブリックアートを採用することが必要であるが、背景となる都市景観とパブリックアートの文脈効果もまた重要であり、その景観に適合するパブリックアートを選ぶことも必要である、ということを実証的に示したといえる。こうした結果は、環境心理学の景観評価研究における重要な理論が示す仮説が、パブリックアートに適用された場合でも、支持されることを示唆しており、学術研究としての重要な貢献であると評価できる。また、こうした実証的な検証は、都市におけるパブリックアート設置実務の指針作成に対する一助となるだろう。また、本論文における研究では、Berlyne の対比の特性と覚醒モデルの示す中程度の覚醒を持つ景観がもっとも高い評価をもたらすという仮説を完全には支持していない。これは、都市景観においては、覚醒の程度に違いがあるものの、適正水準よりも高い覚醒を持つ都市景観はほとんど存在しないということによると思われる。したがって、都市景観評価に対しては、対比の特性と覚醒モデルを再考していく必要性が考えられ、これは申請者および環境心理学における今後の課題であり、今後の発展が期待される。

以上のことから、本論文は環境心理学領域における学識の深さと高い水準で研究を遂行する能力の高さを示すものであり、申請者が専門的な職務に従事するための十分な資格を有していると判断される。

よって本論文は、博士（心理学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成28年1月21日